

徳川将軍家の甲冑と兜

コレクション

久能山東照宮は、徳川 15 代将軍の甲冑をすべて収蔵している唯一の神社である。その中には、徳川幕府を開いた徳川家康公（1542-1616）が関ヶ原の戦いの際に着用し、家康公の将軍就任の道を開いた象徴的な鎧「歯朶具足（しだぐそく）」が含まれている。また、彼が若い頃に着ていた金色の鎧兜 2 着も所蔵されている。

鎧には時代による大きな違いがある。

それ以前の将軍のために作られた甲冑は、戦闘用に作られたものである。戦国時代（1467-1615）は徳川幕府の成立から 12 年後に終わり、17 世紀半ばには甲冑はもっぱら儀式用として使われるようになった。19 世紀半ばの幕末の動乱期には、再び実用的な甲冑が必要とされるようになった。また、時代による甲冑の違いは、幕府の財政の変化を反映している。

その結果、初期の将軍の甲冑は、装飾を最小限に抑え、堅牢な作りになっているのが特徴である。一方、江戸時代中期(1603-1867)の将軍の甲冑は、精巧で高価なものであった。また、後世の将軍の鎧は、装飾を施しながらも、素材やデザインにコストダウンを図ったものが多い。

徳川将軍家の鎧は、1867 年の幕府滅亡まで江戸城に保管されていた。久能山東照宮の所蔵品は、1882 年、幕府滅亡後の初代当主である徳川家達（1863-1940）より献上されたものである。

日本の甲冑

人類の歴史において、鎧は常に機能性と美観の両方を考慮してデザインされてきた。日本の甲冑も同様で、装飾と防御が一体となっている。

特に兜は、兜の庇の上に大きな立物があるものが特徴的である。通常、顔は完全に覆われているため、戦いの最中や遠くから見たときに、紋によって着用者の身元を確認することができたのである。さらに、紋章のデザインは、着用者が持つべきメッセージや属性を象徴するものであった。例えば、鹿の角は雄鹿の強さを表している。また、その荒々しい表情と剛毛の生えた口ひげは、敵を威嚇するためのものであった。

鎧は、首のガード、胴体を覆う手甲、取り外し可能な袖、胴体下部と太ももを保護するスカート、すねと膝を保護する脚部などから構成されている。特に胴体と太ももを保護する部分は、腰から自由にぶら下げることができるので、動きやすい。鎧の多くは鉄や革の小板を何枚も重ね、漆で覆い、布製

の紐でつないだものである。